



TITLE:

或る水曜日の午後

AUTHOR(S):

---

CITATION:

或る水曜日の午後. 天界 1926, 6(66): 364-365

ISSUE DATE:

1926-06-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/160554>

RIGHT:

## 或る水曜日の午後

客「こないだは、えらい見幕だったネー」

主人「どうして？」

客「新時代の迷信だ」なんて——ちと厳しいじゃないか？」

主「ヤア、あれか？ あれには僕も實は驚いたよ!!」

客「何？ 君も驚いたさば？」

主「まあ聞いてくれ。前の水曜日の夕刻だった。僕が大學から宅に歸つて、室で雑誌などで見てゐる時だった。突然、M新聞の記者と言ふ名刺を持つた男がやつて来てネ、ちよつと急に御目にかゝりたいと言ふんだ。」

客「フム」

主「そこで、會つて見ると、『只今、本社から電話がかゝつて来て、是非、先生に御意見を伺つて呉れと言つて参りましたものですから』と言ふんだ。それで『何ですか？』と聞くと、『アメリカから來た電報なのですが、それは、米國のB博士の發表するところによれば、今年は太陽の黒點とブユクナー週期の關係で、夏の暑さといふものが現はれず、全く、夏の無い年だといふ説を發表したといふのですが——之れに對する先生の御意見は如何でせう』といふんだ。僕は『又例のやつだな』と思つてネ……………」

客「フム」

主「…………『いけないよ、其んな電報は!』と先づ言つたわけサ」

客「フ、フ、フ、」

主「『そんなたちの電報が米國から來るのは之れで幾度目だと思ふんです？ 昨年の春以來、とても一々覺えて居られないほどですよ。そしてあなたの社の記者が其の度毎に僕の所に來られるものだから、僕はいつも同じ事を繰返してゐるのです。まア、社へ歸つて、少し古い新聞を調べて御覽。サンデー○○にも僕は一二度そんな事を書きましたヨ、昨年の夏頃に。——さにかく、太陽の黒點といふものは、現に此の頃可なり澤山現はれてはゐるが、あれば純粹に太陽の上での事件であつて、直接この地球世界に影響といふものは無いのです。イヤ、全く無いとは言ひ切れないかも知れないがさにかく、太陽黒點は太陽の表面で電氣を帯びたガスが大きな旋回運動をして、其結

果、可なり大きな磁石性を現はしてゐるのです。それに、多少の電波や電氣そのものを發射してゐるらしいのです。だから、強いて言へば、電氣や磁氣に關した事については此の太陽黒點が地球に影響することはあります。例へば太陽黒點が現はれたがために、地球上の磁石の針が多少狂つたり、又、北の方ではオーローラが現はれたりすることは確かです。現に昨年から世界各地で度々磁氣嵐は觀測されてゐるし、又、珍らしいオーローラも昨年末から歐洲や米國では度々見えてゐます。——しかし言はゞ單に其れだけなのです。尤も之れが今少しひどくなれば有線無線の電信や電話を著しく妨害するやうな事も起つて來ます。そんな事は十年も前から度々レコードがあることです。しかし、かうした電磁氣的の現象を除いて、太陽黒點が直接地球上の天氣を支配するといふやうな事は絶対に無いのです。——絶対にいふのは少し言ひ過ぎかも知れないがさにかく、大きな宇宙を支配する太陽ではあるけれど、其の黒點が地球の氣象に影響するが如何かといふことは今では殆んど確かな證據が無いのです。實は此の問題については、決して新しい問題でなく、數十年以前から學者間には種々論争が行はれてゐるのです。それにも拘らず、要するに未決の問題で、決して之れを學界以外の一般社會に發表するところまで進んでゐないのです。之れほどあやふやな未決の問題であるのだから學者相互の充分な討論や意見の一致を見ないまゝの可なり無責任な學説を、學者が一般社會に公表するといふことは誠につゝしむべきことで、或る意味から言へば、敢へて一種の迷信を廣めるやうなものです……………』

客「それだナ!!」

主「『要するに、責任を知る者は、學者でも新聞でも皆こうした事情をわきまえて、餘り馬鹿騒ぎをさせないやうにしなければならぬ』といったやうな事を言つてやつたのさ』

客「そして神戸のS氏の言葉を君は何と批評したのだ？」

主「S氏の事は何も知らないさ。君はあの新

聞記事を見て、僕がS氏の説を批難してゐると思つたのか？」

客「現に左様書いてあるぢや無いか？」

主「冗談ぢや無いよ!!! S氏の説なんか全く僕は知らないよ!!!——なるほど、あの新聞記事を輕卒に讀めば、S氏と僕とが互ひに異説を吐いてゐるやうに見えるかも知れない。しかし、も一度、よく讀んで見給へ。S氏と僕は全く無關係なんだ。それで僕が想像するんだがネ。實は、あの日、同じ時刻にM社の別の記者が又同じアメリカ電報を持つて神戸へ行つたらしいのだ。そして僕の所へ來たのと同じやうな風にして、S氏の意見を聞いたのだ。いゝかね。ところがS氏が記者に何と答へられたか。そりや僕は知らないサ。勿論、S氏は堂々たる天文家で、しかも太陽學の専門家であり、又一面には氣象學者なのだから、可なり纏つたことを言はれたのかも知れない。しかし、新聞紙で見ると、S氏もやはり大したはつきりした事は言はれなかつたらしいぢや無いか？ むしろ僕の想像では、S氏もやはり此のアメリカ電報をまじめには取らず、却つて嘲笑的に『今年の夏が寒いといふことがあるものか？ 其の逆に、むしろ暑いんだ!!!』とでも言はれたのぢや無いかと思ふ。といふ其の意味は『此の夏は暑い!!!』といふことを強く言はれたのでなくて、只要するに『アメリカ電報はうそだ!!!』といふ意味を強く言はれたのだらうと、僕は想像するがネ。だから、僕はS氏も、アメリカ電報を否定することに於いて全く一致した態度なのだ。』

客「そうかね——」

主「けれど、そこは新聞屋だ。人の了見を多少勝手に解釋して、あんな風に書いて了つたのだよ——イヤ、それよりも、もつて重大な問題がこゝにあるのだ……」

客「何？」

主「新聞社では、京都と神戸とに人を派遣して手に入れた材料を、愈々編輯する段になつて、肝腎のアメリカ電報を全くおさへて了つたのだ。そして單に僕の意見と、S氏の意見とだけを大きな見出しで、並べたといふのだ。だから、よく見給へ、僕の意見とS氏の意見なるものは決して直接に交渉してゐないのだ。ところが、輕卒に讀む人には一寸兩方からの説が正反對のやうに見えるかも知れない。そんな風に讀ませるのが所謂新聞屋の上手といふ所かも知れないが。」

客「それぢや、君とS氏とがうまく新聞社のペテンにかゝつたのだナ!!」

主「マア、そうだね。つまらない話サ！」

客「ナーンのこさだ。新聞といふものは油斷がならないナー！」

主「實にけしからん話だよ。僕として見れば如何することも出来ないぢや無いか？ 全く編輯者の責任サ。マア今までの所では事情が極めて明瞭で、當事者には新聞屋のカラクリがよく分つてゐるから好いのだが若し之れが吾々の實際生活上の問題であつたなら、つまらないジヤナリズムのために、罪もない兩者の間に感情の疏隔が出來て、可なり重大な結果になつたかも知れない」

客「grave consequence だナ！」

主「……………」

客「何とか、君、M社へ言つてやつたカイ？」

主「いや何も言つてやらないがネ。しかし、泣き入りはしないよ。何時か近い中に編輯部の誰かに持ち込んでやるよ。」

客「堂々たるM新聞社もあきれたものだな」

主「全くだ。どうも、あの日、記者がアタフタと馳けつけて來た様子を、あそこから考へて見ると、あの日新聞記事の材料が無くて編輯部が困つたのらしい僕は思ふがネ。」

客「なるほど」

——(Y)——

*Sterne sah ich bereits jugendlich auferstehn,*

*Tausendjährigen Gangs durchs Firmament zu gehn,*

*Sah sie spielen*

*Nach den lockenden Zielen ;*

*Irrend suchte mein Blick umher.*

*Sah die Räume schon-sternenleer.*

— Schiller —